

災害を 一こええて



左：青春を謳歌する青年たち／右：2021年2月の地震の被害

3・11の記憶

私は2011年3月11日は、前々任校のあぶくま養護学校に勤務していました。中3の担任で、高等部受験も終え、卒業式まであと1週間という時期でした。14時30分にもいつも通りスクールバスを見送り、教室で15時過ぎの路線バスで自力通学の練習をするために残っていたAさんと、副担任の先生と教室の掃除をしていた時に、激しい揺れを感じたのでした。

ただただ必死にAさんを机の下に移動させ、根拠のない「大丈夫、大丈夫！」という言葉を探り返したことは10年以上経った今でも鮮明に覚えています。本当に長く感じました。揺れがいつまで続くのか恐怖でした。

福島の困難さ

福島は翌日12日の東京電力福島第1原発の事故が起きて、他の被災地とは異なる困難を抱えることになりました。勤務校には、12日の夜から原発周辺の方々が避難



全障研福島支部
千葉真実

最終回 福島の3・11以後から 災害を考える

先日、甲状腺検査が実施されましたが、当時の放射線量を考えれば大丈夫だろうと思われる子どもたちも多くが検査を受診していました。10年経って、当時の記憶がほとんどない子どもたちにも健康不安を与え続けていることには、憤りを覚えます。

支え合うこと

震災後、高等部に配属された私は9名の担任を3年間経験しました。そこで出会ったB君は、卒業後、郡山市内の食品関係の会社で障がい者枠で採用されて、現在も頑張っているようです。そのB君が、昨年2月の福島県沖の大きな地震が発生した直後に電話をくれたのでした。「大丈夫でしたか？心配だったので」とのこと。私が一人暮らしであることを心配しての電話だったので。そんな気遣いのできる青年に成長してくれたことをうれしく思うとともに、私自身がそんな彼らに支えられて生きているのでは、と感じるようになりました。

災害を乗り越える原動力

教え子や保護者さんとは時々ですがメールのやりとり等で卒業後もかわりが続いている方もいます。最近では郡山に福祉型専攻科を開設した保護者のみなさんとお子さん方を中心に、青年期の余暇活動や要求運動を進めるために「郡山の青年期教育を考える会」(通称・あつまっ会)で活動しています。新型コロナウイルスで活動は制限されていますが、昨年も11月に芋煮会を実施し、交流を深めています。私にはこのように学校関係や全障研、趣味の合唱や組合での活動等を通して、多くの信頼できる仲間がいます。

私はこうした人のつながりが困難に立ち向かう時の原動力になると考えています。「あの人どうしたかな？大変じゃないかな？」と思いをめぐらせ、孤独を防ぐために、何らかの方法で支え合うことが大切なのではないでしょうか。

(ちば まさみ)

してやることになったと記憶しています。たまたま、前日安否確認ができなかった学級の子の情報を得ようと勤務校に行ったところ、校長から「ヘリコプターで搬送されてくる方を受け入れるかもしれない。準備を手伝ってもらえないか？」と言われ、ただならぬ状況であることを察知しました。

以後約1カ月間、あぶくま養護学校は、避難所として避難者の方々のサポートをすることになりました。教育支援部の先生方を中心にサポート体制をつくりました。教育支援部の主任の先生は阪神大震災での教訓を学ばれていた方で、ただサポートするだけではなく、いち早く避難者の自治体制を築くことを勧めてくれたことがとてもよかったです。調理、配膳、清掃、連絡調整等の係を避難者にもお願いすることで、少しずつ連帯感が生まれてきました。

目に見えない、放射線とのたたかい

正直、どのくらい危険で、どの

ような対応をしてよいか、事故当初、私はわかりませんでした。ただ、恐れるばかりでした。対応も今考えたとお粗末なものであったかもしれない。正しい知識が必要だったのです。

市民団体や組合などでの学習会などにも積極的に参加して、除染すればかなり被曝が軽減されること、放射性物質が空中に漂う状態であれば線量を測って低い状態だったら活動は可能、粉塵が舞う時は窓を閉めるということなどを学びました。しかし、いざれにしても毎日試行錯誤でした。正しく恐れて、対応することが大切であると感じました。

健康不安は続く

須賀川支援学校での7年の勤務の後、昨年4月から郡山支援学校で勤務しています。中1の担任をしています。生徒に10年前の震災のことを聞いてみると、「すごく揺れて、保育園で外に避難した」と、辛うじて記憶しているようでした。